



月刊バイブル（世界のベストセラー、聖書のトリビア）

第9号

発行:レムナントキリスト教会

価格:100円（送料込みで200円）

〔目次〕

- ◎聖書からのメッセージ:キリストは世の光 エレミヤ
- ◎高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り(5)「捏造された始祖鳥の化石」
- ◎箴言から学ぼう!:知恵ある人となるために
- ◎詩篇を読む:祈りを聞いてくださる神
- ◎キリストを信じた体験談:神さま(イエスさま)に変えていただいたこと(2)
- ◎聖書に関する偉人のことば:ダニエル・ウェブスター
- ◎ご案内

＜聖書からのメッセージ＞

キリストは世の光

by エレミヤ

〔聖書箇所〕ヨハネの福音書8:12

8:12 イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

今回は、「キリストは世の光」と題して、上記テキストを見たいと思います。この中で、キリストはご自分が世の光であること、また、キリストに従う者は決して闇の中を歩くことがないことを語られました。このことの意味合いを考えてみたいと思っています。

暗いとき、光がないととても不便です。あるとき、私は暗い町である家を探したことがあります。もう太陽も沈み、周りには街灯もない中で家を探していました。家に表札がかかっているのですが、暗くて何と書いてある

のか、読めないのです。自分が探している家なのかどうか、判別できません。幸い、小さな懐中電灯を持っていたので、その光で何とか探しあてたことがあります。

かくのごとく、暗い中で光がないと、私たちは見えるものも見えず不自由するわけです。私が経験した道端が暗いことは、明るい街灯や懐中電灯があれば解決できるかもしれませんが、世の中には懐中電灯があっても見えないことや、誰もさっぱりわからず、何の光もないこともあるのです。

たとえば、私たちは自分の歩む人生に関して必ずしも光を持っているとは限りません。もしかすると光のない闇の中を手探りで歩いているのかもしれないのです。根源的なことをいきなり、単刀直入に聞くようで恐縮ですが、そもそも私たちはどこから来て、どこへ向かう存在なのでしょう？

キリストは世の光 エレミヤ

お母さんから生まれてきた？それは、わかっています。では、最初のお母さんはどこから生まれてきたのでしょうか？かくのごとく、自分はどこから来たのか？というもっとも根源的な質問にも、私たちは光がないことに気付くのです。

さらに、私たちは死んだ後、どこへ行くのでしょうか？死んだ後のことに関しては、多くの人が多くのことを言います。ある人は死んだら無になる、何も残らないと言います。しかし、それは本当なのか？また、ある人は死んだ後、千の風になるなどと言います。しかし、それも本当なのか？ある人は星になると言います。それも正しいのか？死後のことに関して、多くの人が多くのことを言います。しかし、そのように多くの意見があり、説があること自体、じつは誰も本当のことはわかっていないからかもしれないのです。

なぜ、そう言えるのか？なぜなら、本当に皆がわかっていること、正解、真理に関しては、答えは一つしかないはずだからです。たとえば、 $2 + 2 = ?$ という質問に対して、多くの種類の答えなどありません。みな、学校で算数を習って正解を知っているので、たった一つの正解、4という正解しかないのです。そして、それは正しいのです。これらの質問に関して私たちには正しい光があり、真理があり、正解があるのです。

しかし、私たちは自分がどこから来て、そして、どこへ行くのか？という根本的な質問、疑問に関してはいくつもの答えがあり、解答があります。このことを通して、私たちの多くは正解を持っていないこともないことがわかるのです。なぜなら、多くの意見があり、説がある、ということ自体、じつは誰もが正解を持っているわけではない、混乱して、混沌としており、誰もが先のことに関して光を得ているわけでないことを示すからなのです。

日本においては、学校で進化論が教えられているので進化論に従い、人間は物質に過ぎず、魂など存在せず、人は死んだら無になる

と答えるのが正しいと思われているようです。しかし、この月刊バイブルの連載で触れていますように、進化論は、ただの仮説であり、進化の証拠とされているものの多くは根拠の無いものだったり、捏造だったりします。盲信すべき理論とは思えません。

このように私たち人間の根本的な事柄、人はどこから来てどこへ行くのか？という質問に関して、皮肉にも光はなく、闇のような状況なのです。

さて、このような私たち、自分の人生の行く末もよく分からない私たちに対して、イエス・キリストは、冒頭のことばのように、「**わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。**」と語られたことを知ってください。光があるなら、暗くてよく見えなかった道も見えてくるのです。どの道が正しく、その道を歩めばどこへ到着するのか、それも光があれば、よくわかるようになるのです。

私自身のことを少し述べさせてください。私がキリストを知り、信じるようになったのは16歳の頃、今から50年ほど前のことです。キリストを信じて良かったことはたくさんあるのですが、そのうちの一つは冒頭の聖書のことばのように、自分の歩みに光が与えられ、やみの中を歩まなくなったということです。「**わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。**」とのことばは、まだ高校生だった私の心の中で、成就しました。自分がどこから、どこへ向かっていくのか、どこへ行くべきなのか光が与えられ、わかるようになったのです。

高校生に何がわかるか、という意見もあるかもしれませんが、その時、与えられた光や確信は半世紀も経た今でも変わりませんので、正しかったのではないかと今思えます。それまで、私は他の高校生と同じように日本の常識、この世の中の常識に従って歩いていました。いわく良い学校を出て、良い会社に入り、人々から尊敬されるような人生が正しい、

キリストは世の光 エレミヤ

漠然とそんな考えを持っていました。

しかし、キリストを信じるようになった後、私は私の人生に光が与えられ、そのような価値観、この世のことに全精力を費やし、この世の成功やら、名声やら、評判を追い求める生き方が空しいことをたちどころに悟りました。

どのようにして自分の人生を歩むのが正しいのか、その点に関しても光が与えられ、やみの中を歩まないようになりました。キリストご自身こう言われています。

〔聖書箇所〕マタイの福音書16:26

16:26 人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。

このことばのように、私たちがこの短い人生の中で、まことのいのちを得ることこそ、大事なことなのであることを大いに悟ったのです。光が与えられたのです。

このことばを少し解説します。聖書は人が死んだら無になるとは語っていません。むしろ正しい人も、悪い人も、いつか死んだ後、よみがえることを語るのです。以下の通りです。

〔聖書箇所〕ヨハネの福音書5:28,29

5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。
5:29 善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。

ここで言う、「よみがえっていのちを受ける」ことこそ、前述の「まことのいのち」を得ることなのです。そして、このことこそ、もっとも大事なことであるとして、「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。」とキリストは語られるのです。

私たちの今の人生、現世の命は、それこそ野の草や花のいのちのように短いですが、しかし、後の世は長いので、その時永遠のいのちを受けるか、永遠のさばきを受けるかで、それこそ、天地ほども差があるのです。それで、キリストは「たとえ、今の世で、全世界を手に入れ、世界の王となったとしても、得るべき永遠の命を失ったら何の得にもならない」との意味合いを語られたのです。そうです、このことに比べるなら、今の世で全世界を得ることも、また大きな会社を得ることももしくは、ミスユニバースに優勝することも比較にはならないのです。

私はこのことを悟り、このことに関してキリストから光を得、理解したのです。そして、光を得た後、行動が一変してしまったのです。ですので、このもっとも大事な光を他の方も得られたら、と願い、このような冊子を作成しているのです。



キリストは世の光

高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り(5)捏造された始祖鳥の化石

人はどこから誕生したのか?その問題に関して聖書は「神が人を創造した」と述べます。しかし、日本においては、学校で進化論が教えられており、人は猿から進化したと説きます。では、その進化論は正しいのか?それをこのシリーズで見えています。

1859年、ダーウィンは進化論の学説を公開しました。ダーウィンの考えでは、生物は神によって創造されたものではなく、長い年月を経て単純なものから複雑に進化してきた存在であると主張したのです。しかし、ダーウィンの進化論は一つの仮説に過ぎません。当時、ダーウィンは将来確実な証拠が発見されることを期待して進化論を公開しました。しかしその後、検証に値する証拠は未だ一つも発見されていないのです。進化論には現実の化石の発掘などの事実と理論の間には、大きなギャップが存在する上に、理論の論拠も曖昧で、正しく結論付けることができないのです。

けれども、ダーウィン以降の学者たちは、進化論をあたかも一種の科学的な信仰のごとく継承し、真理として学术界や一般に紹介したのです。そのため速やかに、この新奇な仮説は広まり、付和雷同する人々によって真理と見なされてきました。しかしながら、もし進化という現象が存在するなら、進化の過程途中の種と種間の移行タイプが必ず存在するはずなのです。それゆえ、理論上、移行タイプ種の化石の発見が進化論の重大な証拠の一つになるはずなのです。しかし、実際この面での確実な証拠は存在していないのです。当時、ダーウィンなどの進化論者は、20世紀になれば明確な証拠が探し出せるだろうとの推測に基づき、進化論を産み出しました。つまり、曖昧な推測を証拠としたのです。

その後、どうなったかと言うと、現実には、今までに出土した数え切れないほどの多くの化石の中に、推敲と鑑定に耐え、進化論を裏付ける証拠は一つもないのです。今まで何度も、これが人類の祖先だという発見があったのですが、それらは、その検証後、早々と否定されたのです。たとえば、「ジャワ原人」は、1891年、進化論に感化された若者ユージン・デュボアによって発見されたとされていますが、その証拠

とされる骨と言え、頭蓋骨と、歯と、大腿骨だけです。そして、デュボアの説明は、当時の一流の解剖学者ルドルフ・バーコウ博士や、W・H・バロウ博士らによって強く批判されました。頭蓋骨は大腿骨から数メートルも離れた所で発見され、歯は頭蓋骨から数メートルも離れた所で見つかったからなのです。

また、鳥類と爬虫類動物の間にある移行種と思われた六つの「始祖鳥化石」の発見は、世界を驚かせました。しかしその五つの化石は鑑定後、人工的に工作されたものであることがわかりました。残り一つに関しては持ち主が如何なる鑑定をも堅く拒んだのです。最初の化石の「発見者」は、彼の行った捏造の理由を「進化論をあまりに信じ込んでいたので、進化論を証明するために、最も説得力のある証拠を作った」と告白しました。しかし、教科書の中にある「始祖鳥」の記載の誤りは未だに訂正されず、嘘がまかり通ったままなのです。

このような歴史を経て現在では、進化論に関して失望し、疑問を抱く科学者も大いに増えています。イギリスの動物学者レオナード・マッシュューズは、1971年版ダーウィンの種の起源の序文で『**進化論が偽科学だという批判の声はますます大きくなっている。進化論は生物学の大前提となった結果、何の証明もない理論に基づく科学というまことに奇妙な立場に置かれてしまった。しかしこれは科学だろうか、信仰だろうか**』と述べています。



捏造された始祖鳥の化石:始祖鳥とは、Compsognathus(小さな動物)の化石と現代の鳥の羽を合成したもの:胴体のみ化石化し、羽は化石化していない、などということはありません。

箴言から学ぼう！：知恵ある人となるために

〔聖書箇所〕箴言9:1

9:1 知恵は自分の家を建て、七つの柱を据え、

上記聖句において、「**知恵**」ということが言われています。そして聖書の中で、「**知恵**」ということばは度々出てきます。ちなみにパソコンで検索を試みたところ、新改訳聖書において335箇所ありました。言うなれば、聖書の著者である神さまは、「**知恵**」ということばを非常に大事にされていることが分かりますよね？

ところで、第一号においてもチラッと「**知恵**」について触れましたが、今回も同じことが言われていますので、その箇所を見てみたいと思います。同じ箴言9章に書かれています。

〔聖書箇所〕箴言9:10

9:10 主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。

ここで、「**主を恐れることは知恵の初め**」とあります。「**主**」とは、天の父なる神さまのことを言われています。そうなんです。私たちが知恵を得たい！というときに、一番はじめに優先して行っていかなければいけないのは、「**主を恐れる**」ことなのであります。「ハア？何それ？」と思うかもしれませんが、聖書でこのように書かれているので素直に実践していくなら、徐々に知恵を得るようになるのでしょうか。ちなみに「**主を恐れる**」とは、具体的にどういうことなのか？と言うと、第一号で話しましたように、「悪を離れる」ことです。

また、「**知恵**」は英語で“wisdom”とあります。もちろんそのまま「知恵」という意味もあります。しかし「賢明」ともあります。ご存知だと思いますが、「賢明」とは、正しい判断力があることです。そう、もし私たちが主を恐れるなら、あらゆる物事について正しく判断ができるようになっていくのでしょうか。

反対に主への恐れが無いときにどうなってしまうのか？と言うと、単純に今話したことの逆のパターンになってしまうのでしょうか。つまり知恵が得られなくなってしまうのだと思います。また、正しい判断力が欠落してしまうために物事の分別もつかなくなってしまうのでしょうか。

そうするとありとあらゆることがズレていってしまうのでしょうか。

また、主を恐れることも大事ですが、それと共に主に頼っていくときに、知恵を得ることができます。旧約聖書に登場するソロモン王はあらゆる知恵に満ちていました。そんなある日ふたりの女がソロモン王の前に訴えを出しました。ふたりともそれぞれ同じ時期に子どもを出産したのですが、片方の子どもが死んでしまいました。けれどもふたりとも「生きているのが私の子で、死んでいるのがあなたの子です」と主張していました。そうしたところ、「生きている子どもを二つに断ち切り、半分をこちらに、半分をそちらに与えなさい」とソロモン王は言いました。すると、生きている子の母親は、「わが君。どうか、その生きている子をあの女にあげてください。決して殺さないでください」と言いました。しかしもうひとりの女は「それを私のものにも、彼女のものにもしないで断ち切ってください」と言いました。それを聞いたソロモン王は、「生きている子どもを初めの女に与えなさい。決してその子を殺してはならない。彼女がその子の母親なのだ」と言いました。

いかがでしょうか？ちなみに「ソロモン王」は、旧約のイスラエルの王ではありませんが、その他、「聖霊」（主の霊）にもたとえられています。そう、先ほどのふたりの女がしたように、私たちが主に頼るときに、どんな難問であっても、もっとも良い知恵や解決策が与えられるのです。むしろその前に主を恐れることが先決ではありますが・・・もし、聖書で言われる「**知恵**」に興味がありましたら、ぜひこのことを実践していきましょう。そしてソロモン王のように、知恵ある人となっていきたいと思います。



ソロモン王に知恵を求めるふたりの女

詩篇を読む:祈りを聞いてくださる神

[聖書箇所]詩篇4:1

4:0 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデの賛歌

4:1 私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。

「ダビデの賛歌」とありますように、1節でダビデ王は自分の思いを神さまに向けて発しています。そしてさいごに、「私の祈りを聞いてください」と言っています。

ところでノンクリスチャンの頃と言えば、著者は「祈り」とは、ほぼ無縁の生活を送っていました。それこそ初詣とか、寺や神社で特別イベントがあった時には賽銭箱にわずかながらもお金を入れて「〇〇がうまくいきますように！」なんてことを心で願い、手を合わせて祈っていました。けれどもそれ以外の時には、よほど何かがないかぎり、祈るなんてことはありませんでした。しかしクリスチャンになってからは一変しました。今となっては祈り無し of 生活は考えられないほどに、毎日祈るようになりました。そして神さまが良しとする祈りについては、答えてくださるようになりました。そのたびに、ダビデの「聞いてください」ということばではありませんが、神さまがお祈りを聞いてくださっているんだ～、ということをつくづく痛感されるのであります。

過去、こういう話をチラッと聞きました。大分前の話なのでうろ覚えなのですが、当時親子4人で教会に来られていた方がいました。そのご主人がクリスチャンになって間もない頃に、ある問題が起きたそうです。それを聞いた奥さんは、「イエスさまに祈ってみたらどう？」とご主人に助言したそうです。そうしたらご主人は「祈ったからといって、いったいどうなるんだ？」と答えたそうです。つまり、お祈りをしても一切無駄だと思われたそうです。でも、しばらくして考え直して、「もしかしたら聞いてくれるかも・・・」と思ったのか、祈ってみたそうです。そうしたところ、ほどなくしてその問題が無事に解決したそうです。そして「いやあ、お祈りのことを馬鹿にしていたけどさあ、祈ってみるものだねえ。神さまが祈りを聞いてくれるのは、本当のことだったんだあ～」とお

っしゃったそうです。そしてそのご主人は、今ではよく祈り、神さまのために奉仕もされているそうです。もしかすると、お祈りのことを契機に少しずつ変えられていったのかもしれないね。そういう意味では、たかが「祈り」ではなく、されど「祈り」なのであることをご理解いただけたと思います。

そして冒頭の聖句において、ダビデは苦しみの中でお祈りしました。その結果が同篇の7節に書かれています。「あなたは私の心に喜び(KJV:嬉しい、愉快)を下されました」と。どんな理由で苦しんでいたのかはともかく、しかしダビデのお祈りを神さまはきちんとお聞きになり、そしてそのお祈りに答えてくださったことが分かります。「心に喜びを～」とありますように、ダビデの心に喜びを与えてくださったのです。

また、先ほだのご主人やダビデのお祈りがなぜ聞かれたのか？と言うと、その理由について同篇3節で述べられています。「知れ。主は、ご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる」ということです。ちなみに「聖徒」とは、英語で“Godly”とあり、「神のような」という意味合いなのですが、このことは具体的には神さまを愛し、人々を愛するような歩みをしている人のことではないかと思えます。私たちが少しずつでもそんな風に歩んでいくなら、お祈りを聞いてくださるのです。反対に神さまや人々を愛さないというときに、お祈りを聞いてくださらなかつたり、そればかりか神さまから怒りを買ってしまい、悪い意味合いでさばかれてしまう可能性がありますので、気を付けていきたいと思えます。もし、そうかもしれない！なんていう風に思われましたら、徐々にでも実践してみてください。



神にお祈りを捧げるダビデ王

キリストを信じた体験談:神さま(イエスさま)に変えていただいたこと(2)

今回も、神さまに変えていただいたことについてひとつお話ししたいと思います。

私の生まれつきの性質はとても内向的で、そうであるがゆえに、人の前で話すことが苦手なタイプです。そんな中、中学時代に私のクラスの担任の教師が「次回のホームルームから、日替わりで一分間スピーチを始めてもらいます。そして紙を皆に渡すので、感想を書いて本人に渡してください」ということを言いました。正直、これは困った・・・と思いました。やがて順番が回ってきたので何か話をしなければ、と思って最近の出来事を皆の前で話しました。でも、しどろもどろの話し方で、しかも内容も何か本末転倒な感じで全くパッとしませんでした。そして皆の感想と言えば、「良くない」とか「ダメ」とか「もっとちゃんと話をしろ」とかそんな感じでした。分かっていたものの、かなりショックを受けました。でも、やっぱり・・・とも思いました。

それから何年かの時を経て、クリスチャンになりました。だからといって、人前で話することが得意になったか？と言うと、全くそうではありませんでした。なので、他のクリスチャンは神さまがしてくださったことについて教会で話(キリスト教用語:証)をするのですが、私の場合はほとんどありませんでした。今通っている教会の他に、二ヶ所ほど別の教会へ行っていたのですが、いずれも希望者が証を行うというシステムでしたので、自らすることはほとんどありませんでした。

ところが・・・今の教会に行くようになってから礼拝の時に順番で証をする機会が与えられるようになりました。正直、悩みました。そもそも何を証して良いかも分からないし、しかも口ベタだから話もうまくまとまらないし・・・と。ところがしばらくして、エレミヤ牧師が礼拝のメッセージの時にこのようなことを話していました。「今、こんな風に皆さんの前で話していますが、じつは私は人の前で話すことに抵抗がありました。クリスチャンになったばかりの頃に、集会で証を語るようお願いされてどうしよう、と思いました。でも、『何とか話ができるように』と祈りました。そして証をしました。うまく話せたかどうかは分かりませんが、

『良かったよ』と言ってくれた人がいました。たとえ元々話すことが得意ではなかったとしても、お祈りすれば神さまが助けてくださって、きちんと話すことができますよ」ということをおっしゃっていました。

その話を聞いて、私も実践することにしました。「人前できちんと神さまのことを話せますように」と。くる日もくる日も、そのことを祈りました。すると、すぐにではありませんでしたが、ある日を境に以前ほど苦痛を感じなくなりました。実際にしゃべっているのは自分なのですが、しかし神さまが助けてくださって、話ができているなあということを少しずつ実感できるようになっていきました。証する内容も、その都度神さまが与えてくださるようになりました。

もちろん今でも、人前で話することに全く抵抗がないか？と聞かれれば、そうではないのですが、でも、かつてに比べると随分気持ちが楽になりました。祈り始めた頃は、そういう日が来るなんてことは夢にも思わなかったのですが、でも、エレミヤ牧師の話を通して、自分にもそのことが実現したことはすごいっ！と思いました。口ベタだった私が・・・聖書ではそのことを「おし」とか「口が重い」とか「舌が重い」という風に表現しているのですが、神さまがみごとに変わってくださったのです。ハレルヤ！感謝です！さいごに聖書箇所をお読みして終わりにします。

“すると、大ぜいの人の群れが、足なえ、不具者、盲人、おしの人、そのほかたくさんの人をみもとに連れて来た。そして、彼らをイエスの足もとに置いたので、イエスは彼らをおいやしになった。”

(マタイの福音書15章30節[新改訳聖書])”

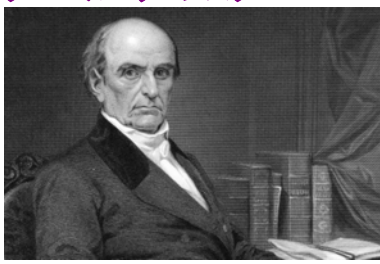


私たちのあらゆる病を癒されるイエス・キリスト

聖書に関する偉人のことば:ダニエル・ウェブスターのことば/お知らせコーナー

<聖書と偉人>

ダニエル・ウェブスター



私の思想や文体に推賞される何ものかがあるとすれば、それは、早くから聖書を読むことに私に注ぎこんでくれた私の両親に負うところのものである。もし、私たちが聖書の教える原理を保持するならば、我々の国は栄えに栄えていくだろう。しかし、もしもその聖書の教訓と權威とを忘れ去るならば、最終的な破滅が我らを圧倒し、我々の栄光をうばい、暗黒のうちに葬り去ることをだれも否定できないだろう。

<お知らせコーナー>

●月刊バイブル無料プレゼント！（限定5名様）

月刊バイブルお読みになっていかがでしたか？もし興味があり、購読をご希望の方はお申し込みください。尚、期間限定サービスとして、申し込み順で5名様までに、本紙、送料共に「1年間無料！」で送付することにします。ご希望の方は以下を記載の上、[mail:truth216@nifty.com](mailto:truth216@nifty.com) もしくは [fax:020-4623-5255](tel:020-4623-5255) もしくは <tel:042-364-2327> へご連絡ください。先着5名様に郵送でお送りします。

「月刊バイブル無料サービスに申し込みます。」

住所:

名前:

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日/午前 10:30-12:30,午後 14:00-16:00

場所:東京都、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館 (tel:042-360-3311)

1Fのエレベーター脇の部屋表示板で、「レムナントキリスト教会」の部屋を確認ください。

どなたでも来会歓迎、入場無料です。tel:042-364-2327, mail:truth216@nifty.com

★教会のHPもあります。

ご興味のある方は、“Yahoo! Japan”で、「府中 レムナントキリスト教会」で検索ください。

尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ&ミルトス <http://remnantnotudoi.jimdo.com/>

☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/>